

和歌山、かけがえのない友

Nguyen Thanh Hoang Trang

日本語・日本文化研修留学生 ベトナム

ある晴れた日、和歌山大学の裏側で、日本風の建物の前で立ち止まった。「あー、チャンだ」、「来た来た、チャンー」うれしそうな声で私の名前を呼びながら、私を抱こうとして、私の方に走ってきた知らない女の子がいた。ちょっと前まで、「初対面に何を言ったらいいかなあ」とずっと心配していた私は、彼女の行為で、自然に心配が消えた。これは新入部員としての私が、和歌山弓道部の道場の玄関に行った時の話だ。色々な学部から来た部員たちは、小さい家族のように、同じ道場の屋根の下で一緒に練習して、悲喜の思い出を作った。特に初めての試合に参加した時の思い出が今でも忘れられない。その日、全員が円陣を作って、肩を抱きながら、「絶対勝つぞおお」、「気合いー」と大きい声で決意



を表した。ほんの短い瞬間なのに、一致団結の精神が強く感じられた。そして、勝利の時、抱き合いながら、笑ったり泣いたりしている人を見た。その一時の涙は勝利の嬉しさだけではなく、信頼に応えた涙だった。なぜなら、弓道部員として試合に出られることは誇りで、信頼のシンボルだからだ。涙の意味を

知った私は、初めて団体の一部として力になれて、本当に良かったと思った。弓道部に入ってから、私の毎日は温かい雰囲気にも包まれた。親切な友達と共に、このように心から嬉しく笑えると思わなかった。遊ぶ時は精一杯遊ぶが、練習時間になったら、真剣に作業をしたり練習をしたりする。部活から分かったのは、

日本人にとって部活はまるで小さな社会で、真面目さや礼儀正しく振る舞いを鍛錬するための所だと言える。

よく耳にする話は、外国人は日本人と結婚した後、日本に何年暮らしても、日本人の習慣や精神がわかっても、客扱いされるそうだ。同じように、半年以上一緒に暮らしたルームメイトたちは礼儀正しくて、優しく扱ってくれるが、どんなに仲良くしようとしても、遠慮のまま距離感があるように心を開いてくれなかった。先生は「色々な日本人がいる」

とよく言っていたが、どうして同じである和歌山なのに、部活の道場の中と外の距離だけで、このような大きい相違があるだろうかと思ひ、驚いた。しかし、気が付いたのは、ルームメイトが心を開いてくれないわけではなく、ただ仲良くする表現がルームメイトは控えめだったのだ。例えば、バイトや部活で忙しいのに、わざわざ花見と一緒に見に来てくれた事とか、毎日部屋に戻る時、「お帰り」と言ってくれるだけで、温かさが十分感じられた。いつも建前を言ったり、人見知りで、自分の気持ちを隠そうとしたりする人々が日本人のイメージだった。それなのに、私が落ち込んだ時、いつも日本語の先生がそっと抱いてくれたり励ましてくれたりする。母の抱擁みたいで、単純な行為なのに、悲しさも懐郷も癒された。地元から遠く離れているのに、このような懐かしく温かさを感じさせてくれて、感謝の気持ちはなかなか言葉にできない。



半年で友達と色々な所に旅行に行つて、東京や京都や大阪のような日本の有名な都市で見たのは、駅でセカセカと歩いていた日本人の姿や高層ビルが一軒一軒並んでいることだ。それらの都市の観光地に日本人も外国人の観光客もおおぜいいて、町が朝から晩まで賑やかな所だ。あまり綺麗で、都市の豪華さに見惚れた。田舎っぽくて、静かな和歌山と正反対だが、一日の終わりに、帰り

たいところは和歌山以外にないだろう。朝になると鳥はあっちこっち餌を探しに行くが、どこまで行つても、夜は必ず巣に戻る。たぶん私は、和歌山はもう二番目の家だと認めているから、疲れた鳥みたいに、どこまで遠い所へ行つても、愛しい家に戻りたいと思うのだろう。最近イオンができたおかげで、買い物便利になった。前は携帯の画面が割れたら、大阪まで修理に行かなければならなかったが、今は携帯修理の所までできて、確かに和歌山は住みやすい所になった。発展は悪いことではないが、発展の流れに大切なものも流される恐れもある。和歌山だけの美しさを失いませんように願っている。

最近、イオンと同じくらい飽きるほど何回も何回も通つた坂道や和歌山大学の写真が撮りたくなつた。突然撮りたくなつたのか、和歌山にいる時間があと三か月余りしか残っていないことに気付いたからなのか分からないが、和歌山の隅々まで心に刻みたい気持ちになつたのがはっきり分かる。

私には留学がこんなに楽しいとは思わなかった。日本で作つた思い出を振り返ると、無意識ににっこりしてしまう。百聞は一見に如かず、実際に日本の美しさを見て、日本人と暮らして、文化をはじめ、日本人の考え方や生活が留学前と比べてさらに分かつた。この素晴らしい留学期間をくださった方々に心から「ありがとうございます」と伝えたい。